



TITLE:

多声的時空間におけるアイデンティティ構築: アイデンティティ研究におけるナラティブ・アプローチの可能性について

AUTHOR(S):

保坂, 裕子

CITATION:

保坂, 裕子. 多声的時空間におけるアイデンティティ構築: アイデンティティ研究におけるナラティブ・アプローチの可能性について. 京都大学大学院教育学研究科紀要 2000, 46: 425-437

ISSUE DATE:

2000-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57351>

RIGHT:

多声的時空間におけるアイデンティティ構築

—— アイデンティティ研究におけるナラティブ・アプローチの可能性について ——

保 坂 裕 子

Identity Formation in the Polyphonic Chronotope

—— A Study on the Possibility of Narrative Approach to Identity Research ——

HOSAKA Yuko

いったい何が、人格の諸要素の内的なむすびつきを
保証しているのだろうか？ただ責任の統一だけである。

(Бахтин, 1919/1994, p. 7)

はじめに

急速に流れる現代という時間のなかで、「わたし」の位置が流動的なものとしてとらえられるようになってきた。もはや人は、ひとつのアイデンティティをもつことによって自己を確立しているのではなく、さまざまに流布するアイデンティティを文脈に応じて選択している。そしてその選択するという行為をもって「自己」の存在を確認する。

これは、アイデンティティについて考える際に重要な問題を提起する。例えば「おとこ」としてのアイデンティティといった場合、「おとこ」のイメージがはじめから確立されており、そのような者としてみなされること、そのようなイメージに同一化していくことが「おとこ」としてのアイデンティティを形成するということであった。しかし、現代において「おとこ」をめぐるひとつの言説など存在しない。すべては多様化し、いわば「大きな物語」(grand/master narrative)としての共通言語や共通イメージ、共通言説は姿を消しつつある。

こうしてアイデンティティの多様化が進み、全てを包括するような評価基準を設定できないために、ひとつの価値尺度をもって評定していくことが不可能になっている。多くの「小さな物語」が併存し、そのひとつひとつが価値をもち、評価基準をもつ。それらが、社会・文化的文脈に応じて、そのつど「選択」され、「使用」される。「アイデンティティ」はもはや、何らかの社会的属性を示すものであるというよりもむしろ、「わたしとは何者であるのか」といった問いをめぐる、文脈に応じて行為主体によって選出され、自己提示のため、あるいは自己を守るために即興的に立ち上げられ、投企されるものであるといえる。したがって、なぜその

ような選択がなされたのか、そこにどのような意味を与えられているのかについての研究が必要となる。以下では、このようなアイデンティティ構成プロセスのダイナミズムについて検討する。

1. 多様化するアイデンティティへのまなざし

アイデンティティの多様化にともなって、アイデンティティに向けられる視点も多様化している。ここではさしあたり代表的なものとして以下の三つをあげる。

第一にあげられるのは、多文化主義 (multiculturalism) の視点である。多文化主義の主張を通じて、人種や民族を固定化し、その境界のなかに閉じこめ、文化間に優劣をつけ、そのことによってある文化を中心におき、他の文化をその周縁に追いやる単一文化主義に対して、それぞれの文化に価値や特徴を認めていくことによって、多くの文化が平等に存在するのだという認識が広がる結果となった。

しかしジルー (Giroux, 1992) は、以上のような多文化主義に基盤をおく言説をポストモダニズムの言説として、次に乗り越えるべき対象に位置づけた。ジルーは、西洋近代を中心とする単一文化主義であるモダニズムに抵抗する言説として、ポストコロニアリズムの言説をあげ、植民地主義によって分割されたそれぞれの文化を基盤としていくことに新たなアイデンティティ構築の可能性を見ている。つまり、これまで被支配の立場におかれていたことによって周縁に追いやられていたそれぞれの文化を中心化していこうとする言説のもつ可能性である。しかしそこでさらに、文化的差異を描き出すだけではなく、そこで行使されていた権力がいかに取り入れられ、抵抗されているのかについて分析を加え、文化・歴史的特徴を見いだすものとして、ポストモダニズムについて言及している。

ポストモダニズムの特徴についてジルーは、次の三点をあげている。はじめに、ポストモダニズムは情報化社会の発展において「知」(knowledge) のあり方が変化していることに照らして、文化と権力の関係を扱う。次に、ポストモダニズムはいかに文化が中心的、また周縁的階層を生み出してきたのか、またそこにいかに服従の形態の再生産が入り込んでいるのかを問う。そこで、そのような差異を生み出していた文化に対する優劣の視点をなくし、研究の重要な対象として日常のあり方を問う。これが第三点目である。こうして、従来支配的であったディスコースを解体することによって新たな知の形態を生み出そうとするのだ。

しかし、このような多文化主義に基づくアイデンティティ研究の限界は、多様なアイデンティティが並列的に並んでいるにすぎなく見られてしまうことである。そこには、何が価値あるもので、何が排除されるべきものであるのかという視点はなく、すべてが平等であるとされている。しかし、現実社会で私たちは、何らかの価値基準によって判断しているのであり、そのことを無視することはできない。

ここで必要とされるのは、アイデンティティを一義的で固定した価値基準によって秤にかけることでも、またたんに多様化することによって価値自由であるかのように扱うことでもない。現状を批評的にとらえ、多くの声が響きあうなかで、共同で価値基準を見だし、構築してい

くことが必要とされているのである。これは、ジルーの志向する「境界教育学」(border pedagogy)の特徴のひとつとしてもあげられている。アイデンティティをめぐるポリティクスとは、ポストモダニズムのように多様化・並立化の視点にとどまるのではなく、多様ななかからいかに新たな価値基準を構築していくかという問いに向かうことである。それには、それぞれの価値基準をもった多種の共同体が必要とされるのではなく、自らのもつ境界を越え出ることによる他者(他の共同体)との接触を通して共同で新たな価値基準を構築していくことが必要とされているのである。

第二は、エスノメソドロジーの視点である。そこでたてられる問いは、ある人がどのようなアイデンティティをもっているのかよりもむしろ、どのようにさまざまなアイデンティティが行為主体によって使用されているのかである。エスノメソドロジーの視点においては、日常生活のあり方そのものが、人々の出来事の理解を示していると考えられる。とりわけ、会話分析(conversation analysis)では日常会話を通して行われる相互理解に着目している。

アンタキとウィディコム(Antaki, & Widdicombe, 1998, p.3)は、会話分析の視点に立ったアイデンティティ研究を進めるなかで、次の五つの一般原理を提起している。

- ・人は「アイデンティティをもつ」ために、その特徴や特性に関連する何らかのカテゴリーを、与えられる(to be cast)；
- ・そのような配役(casting)は、ある具体的対象として指し示されており(indexical; 指標的)、その時々のも(occasioned)である；
- ・それは、そこで起こっている人と人との関わり(相互作用)におけるアイデンティティを適切なものとする；
- ・「アイデンティティをもつ」ということの影響力は、相互作用の結果としてあるのであり；
- ・これらすべては、人々の会話構造の利用において見ることができる

アイデンティティは社会的に利用されるツールであるため、そのアイデンティティをもつということはつまり、あるグループのメンバーであるということを保証する。しかし、そのアイデンティティはある個人に内在した何らかの特性というわけではないため、即興的なものであり、状況に応じて与えられるカテゴリーは異なってくる。「人々は、創造的に、予測不可能なやり方でその相互作用においてアイデンティティを作り上げ、また抵抗している」(p.14)のであり、そのようなプロセスは会話を分析することを通して見いだすことができる。

しかし、エスノメソドロジーの視点では、社会的カテゴリーとしてアイデンティティが位置づけられており、行為者がそのカテゴリーの外に出ていくことは想定されていない。いずれかの与えられた社会的カテゴリーに属し、そこでの役割を演じることによって、アイデンティティが達成されると考えられているのである。このように、提供される社会的カテゴリーに基づくアイデンティティの選択のみを焦点化するエスノメソドロジーの視点では、それらの使用をめぐる問題しか取り上げることができない。しかしアイデンティティは、受動的に使用されるのみではなく、積極的に生成されるものでもある。

第三に、社会的構築主義(social constructionism)の視点があげられる。社会的構築主義におけるアイデンティティは、何かあるものを本質的な特徴や性質をもつ本質主義的なものとしてとらえるのではなく(これは「パーソナリティ」として区別される)、それをある人がそのも

のとして特定する（あるいは同定する〔identify〕）こととしてとらえられる。例えば、ある植物を見てそれを邪魔なものとするか、食べられるものとするかは、特定しようとする人の目的によって異なる。もし庭師であればそれを邪魔な雑草とするだろうし、食料を探しに来ている人や、放牧をしている人であれば食べられるものかどうかが問題となるだろう。つまり、行為主体が問題にしている社会・文化的文脈において、その立場から何らかの目的をもって特定されるものをアイデンティティという。これは、対象が人間であっても同様である。ある人が日本人であるか、またはそうではないのか、学生なのか教師なのか、これらが問題となる文脈があり、ひとはそれぞれの文脈でさまざまな社会的言説によって提供されるアイデンティティの糸によって、アイデンティティという織物を織り上げていくといえることができる。バー（Burr, 1995）は、言説の立場づけの枠組み（Davies, & Harré, 1990）に基づき、次のようにまとめている。

人は、自らが現在占めている言説内での主体の諸立場の総計によって記述される。それらの諸立場のいくつかはつかの間のものであり、流動的な状態であるという事実は、われわれのアイデンティティが決して固定的なものではなく、常にその途上にあり、また変化に開かれていることを意味する。私たちの占める主体の諸立場は、同時に諸権利と諸義務の構造を持ち込み、「その類の人」の言動について、当然行ってもよいことやいけないことを規定する。（p.152）

しかし、これらの諸立場におけるアイデンティティの糸は、必ずしもいつも何の問題もなく結び合わされるというわけではない。それぞれの立場が社会的言説のもとに成り立っているために、それらが相容れないこともありうる。

さらに、それらがある時には適切であるとされたり、またある時には容易には結びつくものではないとされたりするのは、社会的言説がある権力をもっていることに根ざしているのであり、そのような権力を生み出し、維持している社会的構造や習慣などについて、言説分析などを通して検討していく必要があることをバーは指摘している。つまり人は、社会的に提供されるカテゴリーを選択することによってアイデンティティを構築していくのであるが、その際に社会構造や社会的慣習が大きく影響するのであり、その選択がまったく自由に行われるのではないということである。

このように、社会的構築主義の視点では、アイデンティティはその社会的文脈に応じて選択されるものであり、そのつど選択されたものの総計がその人のアイデンティティであるとされている。しかし、アイデンティティとは、選択の総計以上のものではないだろうか。また、アイデンティティの選択についても、誰がその選択を行っているのかといった、主体的関与（agency）の問題が社会的構築主義では必ずしも明確ではない。

以上の三つの視点からのアイデンティティへのアプローチにおける問題点を踏まえたうえで、本論文においては、「ナラティブ」に着目したアイデンティティへのアプローチの可能性について検討していきたい。多様に提供されるアイデンティティが、現実社会において価値並列的に併存し、それらが社会・文化的文脈によって選り分けられ、それらの総計としてアイデンティティが表されるというのでは不十分である、というのが本論文の問題意識である。

文脈に応じて多様なアイデンティティがバラバラにありうるというわけではない。それらは

歴史的文脈によって関連づけられており、現実の社会的文脈において価値基準にさらされている。また、文脈ごとに選択されたアイデンティティがすべてひとりの人間の表現として総計されるというよりも、むしろ、現実と与えられた文脈や自らのライフ・ヒストリーと、その文脈における未来への可能性とのせめぎあいのなかでそれは紡ぎ出されるものであろう。その葛藤のプロセスを、アイデンティティ実践のプロセスとして考察の対象にすることが必要となる。

こうしたアイデンティティ研究への着眼は、あらかじめ社会的に与えられたカテゴリーとしてのアイデンティティをいかに使用するかというストラテジーや、社会構造や社会的慣習の背景としてある権力についての分析を踏まえたうえで、さらに先へ進もうとするものである。ここでは、以上の観点から、アイデンティティ構築へのアプローチとして「ナラティヴ」のパフォーマティヴな側面に着目してみたい。

2. ナラティヴとアイデンティティ

ナラティヴ（語り；narrative）は、人間の行為を理解するうえでのひとつの有効なアプローチとして採用されてきた。バンバーグ（Bamberg, 1997d）は、ラボフとワレツキー（Labov, & Waletzky, 1967=1997）のナラティヴ・アプローチの枠組みから、以下のような二つの側面を見いだしている。ひとつは、ナラティヴのもつ構造的側面に着目するものである。ここでのナラティヴは、とりわけ個人的な経験について語られるものであり、その出来事が個人にとってどのような意味をもったのかを検討される。ある出来事や経験がその語りのなかでどのように語られるのかが問題となり、語りのなかから評価的な発話を取り出して分析する例などがあげられる。特に、社会言語学的な立場では、ナラティヴの単位としての節（要旨；abstract, 設定；orientation, 出来事；complicating action, 評価；evaluation, 結果；resolution, 結語・しめくくりの言葉；coda）相互の連鎖がどのようなものであるかに焦点が合わせられる。ナラティヴの構造に焦点化するこのアプローチでは、ナラティヴを静的な対象として第三者の視点から客観的な分析・解釈がなされる。

もうひとつは、ナラティヴのパフォーマティヴな側面に着目するものである。つまり、語るという行為そのものに焦点化し、そのことがもつ意味について探究する。そこでは、ナラティヴは言語実践であり、語るという行為を通して他者と相互作用するなかでその意味が規定されると見なされる。

バンバーグは、後者に焦点化したうえで、ナラティヴをそのみで対象化して分析するのではなく、相互作用の過程に位置づける。特に、語るという行為の生成的側面を見いだそうとしたのが、ポジショニング・アナリシスである（Bamberg, 1997a, 1997b, 1997c, 1997d; Talbot, Bibace, & Bamberg, 1996; 保坂, 1999; 保坂・山住, 2000）。ここでのナラティヴは、対象として分析されるというよりも、語るという行為を通して何が遂行されているのかに着目する。この立場では、他者（聞き手）との関係においてそのように語ることによって、何をクレイムしようとしていたのかを分析することによって、語り手の変化するアイデンティティの方向性を探ることが可能となる。

ナラティブは、語りの内容（ナラティブ世界）による位置づけ、現実の世界における他者（聞き手）との関係における位置づけ、さらには自己に対する位置づけの総体としてなされる。それらは、以下のような三つの問いによって互いに位置づけられる。

第一のレベルで検討されるのは、報告されている（語られている）出来事のなかで、いかに登場人物が互いに位置取られるか、という問いである。例えばバンバーグ(Bamberg, 1997a, 1997b, 1997c, 1997d)は、子どもの感情的な出来事についての説明を分析している。「誰かを怒らせたとき」と「私が怒ったとき」についての語りを求めたところ、「怒らせたとき」については、自らを行為主体として位置づけるのではなく、自らのコントロールの及ばない状態で、つまり仕方なく、たまたま起こってしまったもの（事故）として語る。「ぼくが弟からおもちゃを取り上げて、拳を突き出したらそこに弟がぶつかってきたんだ」と、行為主体を他者（この場合は弟）にすることによって、面目を保とうとしている。それに対して、「怒ったとき」については、ある行為が意図的に、不正に自らに向けられたものであるとして、両者の関係を犯人とその犠牲者であるかのように語る。「お姉ちゃんが、ただ私を部屋に入れたくないからといって顔をぶったとき」など、自らを被害者として位置取らせ、聞き手に道徳的なスタンスを取らせようとしている。

第二のレベルで検討されるのは、語り手が聞き手に対していかに自らを位置取るのか、という問いである。ナラティブはこのレベルで、社会的文脈や関係性の影響を大きく受けることになる。ナラティブにおいては、通常の会話のようにターン・テイキングが行われるというよりは、語り手の話を聞き手が聞くといったような役割分担がある程度固定化している。したがって語り手は、自らの語りの作者としてある程度自由に語りのなかに出てくる登場人物や出来事を操作することができるが、聞き手は、語りを構成するうえでのひとつの要因という以上の意味をもつ。誰に対して語るのかということが、その語られる内容に影響を及ぼすことは、想像に難くない。聞き手が、教師であるのか、友達であるのかによって同じ出来事を語る際にも、語りのモードは異なるであろう。例えば、語り手が聞き手に相談を持ちかけているのか、それとも自分の行為に対する申し開き（言い訳）をしようとしているのか、他者の行為を非難しようとしているのか。このレベルでは、語りが誰に向けられているのかという宛名が問題となり、語り手と聞き手の関係という現在の相互作用の文脈において、お互いが位置づけられ、またナラティブに意味が付与されていく。

第三のレベルで検討されるのは、語り手がいかに自分自身に対して自己を位置取るのか、という問いである。とりわけ、語りのなかに自らも登場人物として参加するような場合には、登場人物としての自己に対して、距離をとって語ることになる。つまり、自己を他者化したうえで、語りのなかに位置づける。この自己に対してある位置から語ることこそが、自らのアイデンティティについて語るということである。

このような視点は、次のようなヴィゴツキー（Выготский, 1925/1982）とバフチン（Бахтин, 1963/1994）の自己に関する考察の基本的姿勢と呼応する。

われわれが自分を意識するのは、われわれが他者を意識するからなのだ。そして、われわれは、われわれが他者を意識するさいの仕方とまったく同じ仕方、自分を意識するのである。というのは、自分に対するわれわれ自身のあり方は、われわれに対する他者のあり方とまったく同じなのだ。したがって、私自身が自分にとっての他者であるかぎりにおいてのみ、つまり、私が自分の反射をふたたび新たな刺激として知覚するかぎりにおいてのみ、私は自分を意識するのである。(Выготский, 1925/1982, p.96)

他者の意識は客体として、事物として洞察し、分析し、定義するわけにはゆかない。可能なのはただそれと対話的につきあうことだけである。他者の意識について考えるとは、すなわちそれらと語り合うことである。さもなければそれらはすぐさまこちらに客体としての側面を向けてよこすだろう。そして沈黙し、自己を閉ざし、完結した客体としての姿に凍りついてしまうだろう。(Бахтин, 1963/1994, p.43)

つまり、自己のアイデンティティについて、それを語りのなかで他者化したうえで語るという点において、対話的に理解する必要がある。

社会的文脈や、聞き手（他者）との対話において語り手は、ある社会的カテゴリーに属することを期待される。そこで、提供される社会的カテゴリーに対して、いかに自己を表現していくのかが問題になる。受動的に提示され、与えられる社会的カテゴリーに対して、自らは自己をどのようなものとして主張していくのかといったアイデンティティ・クレームが語りのなかに表示される。

アイデンティティはこのように、社会的地平に属するものであり、他者との対話によって構築されるものであるということが出来る。自己を位置づけ、語ることによって、語り手は、聞き手に自分はどのように理解されたいのか、といった問いに対する（局所的な）応えとして「わたしは何者であるのか」を構成する。この問いに対する語り手の意図的な応答は、その文脈を越えてあるものではなく、限られた範囲内でのプロジェクト（project; 投企）としてある。社会・文化的文脈、他者との関係のなかに、自らのアイデンティティの語りを投企することによって、アイデンティティ・クレームを行うが、投げ込まれた語りは他者（ここでは聞き手）によって受けとめられ、応えられたときにはじめて意味づけられる。

以上のように、ナラティブを三つのレベルに分けられた問いによって位置づけられたものとしてそのプロセスを分析していくことによって、ナラティブを通して語り手がどのようなアイデンティティ・クレームを行おうとしているのかについて検討することができる。出来事や行為が語り手によってどのようなものとして意味づけられ、そこでいかに行為主体が構成されるのか、また誰に対して語りが構成されたのか、そこでどのようなアイデンティティ・クレームが行われていたのか。このように、語るという行為を通して、アイデンティティはそのつど行われるローカルなプロジェクトとして構成されているのであり（Bamberg, 1999）、またそれは社会文化的に位置づけられる対話に開かれたものであるといえる。したがって、アイデンティティは人間の行為における相互に関係しあう契機としての、社会文化的なプロセスと個人の機能を共に考慮に入れなければならない（Penuel, & Wertsch, 1995a）。

ここでいう対話とは、ある完結した一連の会話の連鎖を指すものではない。言葉は常に未決定性をあわせ持ち、発せられたあとに続く発話（返答）によってはじめて意味づけられる。そ

してその返答も次の発話によって意味づけられるのであり、発話は閉ざされることのない未完の連鎖（対話）のなかにある。つまり、対話とは、常に進行中で閉ざされることのない未完的な全体像を指す。したがって、発話は語り手が恣意的に行うものではなく、常に聞き手（他者）との関係において意味づけられるものである。またこのことは、社会・文化的文脈をも背景にしていることを意味する。

「大きな物語」が崩壊し、偏在する「小さな物語」に依拠していたとしても、ナラティブが以上のような社会的側面をもつ限りにおいて、社会的カテゴリー、もしくは社会的にドミナントなディスコースの影響を受けないわけではない。他者から向けられる視線に対して、いかに応答していくのか、クレイムしていくのが問題になるのであり、他者によって見られている「わたし」がいかにそれとは異なるのか、ということをもってしか私たちはアイデンティティを立ちあげることはできない。したがって、問いは次のように言い換えられ、応えられる。「わたしは何者ではないのか」(Penuel, & Wertsch, 1995b; 保坂, 1999)。

私たちは、社会文化的実践のなかで、他者からの視点とのせめぎあいのなかで、そのつどアイデンティティ・クレイムを行っている。それは、自己と他者の間にある大きな狭間を即興的に埋めるべく、せめぎあいのなかから紡ぎ出された応えを、他者との関係、社会文化的文脈のなかに投企し、対話へと開いていくことである。

エマーソン (Emerson, 1996) は、発話行為に見られる心理の現れについて次のように述べている。

個人は特定の発話行為において他の個人たちと横の（「水平な」）関係を形成し、それと同時に外の世界と自分自身の心理との間に内的（「垂直な」）関係を形成する。この二重活動は絶えず行われ、その相互作用は実は心理を構成する。かくして、心理は内的現象ではなく境界現象なのである。(p.126)

ここでいう「水平な関係」と「垂直な関係」は同時に検討されなければならない。「水平な関係」とは、他者との対話において他者の視点と自己に生じるギャップである。また、「垂直な関係」とは、自分自身が何者であり、何者になりたいのかという、所与 (given) と可能 (possible) とでもいえるものの間に生じるギャップである。アイデンティティについての研究を進める際には、この「二重活動」のなかで生じるギャップをめぐるせめぎあいを通してそのつど「わたしは何者ではないか」という他者の視線に対する抵抗として構成される側面に着目していかなければならない。

3. 多声的時空間におけるアイデンティティ実践

ナラティブは通常、言葉という文化的媒介ツールを用いて行われ、ある特定の文脈において、他者に向けて発せられる。ナラティブにおいては、事実をありのまま伝達することが求められるのではなく、話の筋の適切性や一貫性が必要とされる (Wertsch, 1997, 1998)。発話者がどのように出来事や人物を意味づけているのか、また位置づけたいのかという意図が意識的に働く。したがって発話者は、自らの語りの世界における作者であるといえる。作者の意図によってすべての登場人物や出来事が位置づけられる場合、登場人物は自らの声をもつというよりも、

作者の意図によって発話させられるのであり、意味づけられる。このようなナラティヴは、バフチンの批判するモノローグの世界になりうる。モノローグの世界ではすべての意味や価値などがひとつの視点によって位置づけられる。

レンスマイヤー (Lensmire, 1997) によると、バフチンの批判するモノロジズムは、世界と人々を次の相互に関連する三点において閉ざしてしまう。第一に、モノローグのもとでは複数であったり多様であったりすることが、余分で不必要な、誤りであるとされる。単一の基準で何が本質的で真実であるのかということが決定されるために、意味や価値の多様性や差異は、誤りであるとされてしまうのである。第二に、モノロジズムは誰が真実を知っていて誰が知らないのかということを階層的に序列化する。例えば学校の教室においては、教師が知識をもっていて子どもたちはもっていないという一義的な意味づけがされてしまう。第三に、モノロジズムは世界や人々を閉ざされた世界に閉じこめてしまうので、人間を単なる対象にしてしまう。子どもはより知識をもつ教師によって評価される対象となってしまうのである。それぞれが主体性をもって行為するのではなく、ある者がより権力をもち上位に位置づけられる。その者だけが主体的に行い、後はすべてそれに従属する対象となってしまう。

それに対して、多声的な (polyphonic/multivoiced) 世界の特徴は、声や視点の多様さということにある。こうした多声的な世界に向かうためにバフチンは、多声的な小説に可能性を見いだしている。多声の小説においては、それぞれの登場人物が自らの声をもつことによって、ひとつの視点によって意味づけられたり価値づけられたりする対象となるのではなく、自らの声も響かせることによって主体的に意味生成に参加することが可能となる。このことから、ナラティヴの世界を語り手のモノローグによって構成するのではなく、多声的空間として語り直していくことによって、未来へと接続されうる時空間を構成していく必要があるということができよう。

なぜならナラティヴは、ある特定の発話のジャンルと結びついており、バフチンによるとこのジャンルの背景には、あるクロノトポス (時空間；時間的関係と空間的関係との本質的な相互関係, Бахтин, 1940/1975, p.234) が見られるからである。バフチンは、クロノトポスとジャンルを以下のように関連づけ、さらにそこで想定される人間像との関係について考察している。

文学におけるクロノトポスは、文学の各ジャンルを決定するうえで本質的な意義をもつ。なぜなら、文学の各ジャンルのありようを決定するのも、一ジャンル内の各下位ジャンルを決定するのも、まぎれもなくクロノトポスだ、と端的にいえるからである。(…) しかも、クロノトポスは、形式＝内容上のカテゴリーとして、(相当程度) 文学のなかの人間像をも決定する (p.235)

モノローグとしてのナラティヴは、それを構成するクロノトポスがモノローグに支配されているということを意味する。モノローグ的時空間においては、視点がひとつしか存在せず、出来事は直線的に並べられる。そして、多様な出来事は、同一直線上に位置づけられていく。つまり、出来事は新たな視点として加えられるのではなく、すでにあったものとして過去の時空間に位置づけられる。このような歴史の逆しまによって未来は過去へと回収されてしまい、未来との連続性が断たれる。このように閉ざされた世界を構築するモノローグ的時空間に対して、

それぞれの声が響きあう多声的時空間においては、新たな視点が次々に取り入れられ、未完の未来へと続くナラティブが可能になるだろう。

出来事やアイデンティティをある固定したモノローグ的時空間に閉じこめるのではなく、他者との対話を通じて、新たなクロノトポスを共同で構築していくことで、私たちは未来という時間を想定することができる。このことは、「(…) 新しい調和のとれた全一的な人間と新しいかたちの人間的なコミュニケーションのために、それにふさわしい空間的・時間的世界を、新たなクロノトポスとして構築するという課題と結びついている」(p.360)。

こうしたクロノトポスの構築では、すでに習慣化し、当たり前となってしまうために固定化・安定化してしまっているものに、疑いの目を向けてみることで、自らの(生活)実践を批評的に検討してみることにによって、より拡張した新たな社会的空間を共同で再構築していくことが求められている。これまでの決まりきった意味づけの枠を乗り越え、「(…) 事物と概念のあらゆる習慣的なつながり、ふつうの隣り合わせをこわし、思いもかけない隣り合わせ・思いもかけないつながり(…)を創出するということに帰着する」(p.360)。このような新たな出来事の隣り合わせ(隣接複合; matrix)によってもたらされる新たなクロノトポスにおいては、これまでとは異なった語り口によって自己について語るができるのであり、異なったアイデンティティを立ちあげることが可能になる。したがって、ナラティブの多様な実践においては、このような時空間において自らのアイデンティティについて語り直していくというアイデンティティの実践が目指されるべきであろう。

このような多声的時空間を生み出す実践は、ナラティブを現実の社会においてアイデンティティを構築するツールとして利用することにつながる。多声的時空間において生み出されるナラティブは、ふたたび現実の社会実践へ向けて投企されるのであり、アイデンティティ構築はこのように対話的に遂行され、常に未完な余剰部分を残したまま生成され続けると見ることができる。

しかしここで語りの多様性のみが重視されるならば、個々の文脈においてなされる語りがバラバラなものであったとしてもよいことになる。バフチン(Бахтин, 1919/1994, p.7)は、人間文化の三つの領域として学問、芸術、生活をあげ、これらが統一を獲得するのは人格においてであると述べている。そこで問題となるのは、これらの結びつきによる統一は、単に機械的で外的なものとなりうるということである。

全体は、その個々の要素がただ空間と時間のなかで外的な結びつきによって結合され、内的な統一ある意味に貫かれていない場合、機械的なものと呼ばれる。そうした全体の部分同士は、たとえ並んで触れあってはいても、自らは互いに無関係なのである。(p.7)

ナラティブが、静的な分析の対象としてその構造のみが取り出され、現実の生活の文脈とは無関係に扱われた場合、ナラティブ世界と現実世界は、一個人のなかで機械的に結びついているにすぎないということになる。互いは無関係なままであり、ナラティブの世界に見いだされる可能性は実践において実現されることはない。つまり、ナラティブによる可能世界と直面している現実とは、そのギャップが埋められることなく、統一も相互浸透もされない。したがって、機械的に並べられているにすぎない両者は、相互に影響を及ぼしあうこともなく、ただ無関係

に並べられているにすぎない。

何がそれらの内的な結びつきをもたらすか。何が両者のギャップを埋めるのか。バフチンによるとそれは、責任(ОТВЕТСТВЕННОСТЬ)を介した統一によって達成される。ロシア語のОТВЕТは、答、返事、回答などの意味をもつ。したがって、ここで用いるロシア語の責任は、可能なる応答という意味合いを含み込んだものであると考えられる。つまり、一個人のなかで互いに機械的に、無関係に並べられているにすぎないナラティブの世界と現実の生活世界、もしくは「ありうる(えた)世界」(possible worlds)と「そうである(所与の)世界」(the given world)は、「わたし」という行為主体によってそれぞれが応答されることによって統一が果たされることになる。

アイデンティティ構築を社会实践として位置づけた場合、ひとつのツールとして利用可能なナラティブと実際の社会生活が切り離されたものとして考えられていたならば、ナラティブによってアイデンティティ実践が変化するものとはなりえない。「わたし」という行為主体の責任において、ナラティブ世界と現実世界をつなぐこと、それぞれに応答していくことによって始めて、固定した枠のなかに閉じこめられていたアイデンティティが、実践のレベルで変化することが可能になる。つまり、現実世界への応答として(可能な)ナラティブを構成し、さらにそれを媒介ツールとして現実世界におけるアイデンティティを構成していくという循環的プロセス、つまりバフチンのいう対話に開かれた未完の関係をとらえていくことこそが、ナラティブのパフォーマティブな側面に着目したアイデンティティ研究のもちうる可能性であると考えられる。

ナラティブをそれが構成される現実世界から切り離し、それだけで成り立ちうるものとして研究の対象とするのでは、アイデンティティ実践のダイナミズムをとらえることはできない。ナラティブの世界と現実の世界が、行為主体の責任を介して相互に応答しあい、その間に対話が生じることによって、未完の未来へと開かれていくことが可能になるのであり、そのプロセスに焦点化するアプローチとしてナラティブ・アプローチは可能性をもつ。

エマーソン(Emerson, 1996)によると、ヴィゴツキーが研究を通して提起していた問題は、「いかにして人間は自己にこもらずにいられるのだろうか」(p.138)であった。そして彼が出した答のひとつは「私たちは言葉を通じて自分が何者ではないのか、今後何者になる可能性があるのかを知ること」(p.138)である。そしてまさにこの同一化ではなく、解放において私たちは、所与の(given)世界から抜け出し、新しい(possible)自己のあり方を追求し続けることができるのであり、そこに変化・生成し続けるアイデンティティの実践を見いだすことができる。つまり、ナラティブの世界と現実の世界が、行為主体によって、対話を通して応答されていくことによって、アイデンティティが拡張していく可能性が開かれる。ナラティブ・アプローチは、このアイデンティティ実践のダイナミズムをとらえていくうえで、有効なアプローチになりうる。

おわりに

価値が多様化し、そのそれぞれの価値が小さな共同体において認められるようになったポストモダンといわれる現代においては、アイデンティティのあり方についてのとらえ方も多様化している。そこで、アイデンティティが固定した静的なものであるというよりもむしろ、文脈に応じてそのつど選択されるという視点が採用されるようになった。

しかし、そのそれぞれの共同体でカテゴリーとして提供され、適切とされるアイデンティティは、実際には価値並列的に並んでいるというわけではない。そこで適切とされるアイデンティティ、そこで提供されるアイデンティティは、ある社会・文化的に構成されている価値基準の影響を受けている。また、私たちは、社会・文化的に所与であるアイデンティティのカテゴリーを受動的に選択しているというわけではない。私たちは社会・文化的な文脈において提供されているアイデンティティを媒介させながら、自らはその所与のアイデンティティのあり方とどのように異なるのか、つまり、何者ではないのかというクレームとしてアイデンティティを対話的に構築している。

多声的な時空間におけるナラティブの世界と現実の世界が、行為主体の責任を介して互いに応答されることによって、未知の未来へのヴィジョンが見いだされる。ナラティブ・アプローチは、ナラティブを構造として静的にとらえるのではなく、行為主体がその責任において、多声的なナラティブの世界と現実の世界に応答していくプロセスといったパフォーマンス的な側面に焦点化する必要がある。ナラティブのパフォーマンス的な側面に着目したアプローチを進めること、つまり、アイデンティティ実践が社会的対話を通して遂行されるダイナミックなプロセスに焦点化していくことによって、アイデンティティ実践への新たな知見がえられると考えられる。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、ご多忙中にもかかわらず丁寧にご指導下さった、京都大学教育学研究科、山田洋子教授に、深く感謝いたします。

参考・引用文献

- Antaki, C & Widdicombe, S. (1998). Identity as an achievement and as a tool. In C. Antaki & S. Widdicombe (Eds.), *Identities in talk* (pp. 1-14). London: Sage.
- Бахтин, М. М. (1919/1994). Искусство и ответственность. Вкн. М. М. Бахтин, *Работы 20-х годов*. Киев: Next. (1999. 佐々木寛訳「芸術と責任」『ミハイル・バフチン全著作第一巻』水声社.)
- Бахтин, М. М. (1940/1975). Формы времени и хронотопа в романе. Вкн. М. М. Бахтин, *Вопросы литературы и эстетики*. Москва: Худож. лит. (1987. 北岡誠司訳『小説の時空間』新時代社.)
- Бахтин, М. М. (1963/1994). Проблемы поэтики Достоевского. Москва: Алконст. (1995. 望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房.)
- Bamberg, M. (1997a). Emotion talk(s): The role of perspective in the construction of emotions.

- In S. Niemeier & R. Dirven (Eds.), *The language of emotions* (pp. 209-225). Amsterdam: John Benjamins.
- Bamberg, M. (1997b). Language, concepts, and emotions : The role of language in the construction of emotions. *Language Science*, 19, 309-340.
- Bamberg, M. (1997c). Is there anything behind discourse? : Narrative and the local accomplishments of identities. Paper presented at *ISTP conference*, April, 1997, Germany.
- Bamberg, M. (1997d). Positioning between structure and performance. *Journal of narrative and life history*, 7, 335-342.
- Bamberg, M. (1999). Narrative and discourse: Social, personal, and institutional. Keynote lecture at '99 Kobe symposium, *Narrative and the socio-cultural studies : Lived experience, diverse voices, and identity as narrative*, March, 1999, Japan.
- Burr, V. (1995). *An introduction to social constructionism*. London and New York: Routledge. (1997. 田中一彦訳『社会的構築主義への招待』川島書店.)
- Davies, B. & Harré, R. (1990). Positioning : The discursive production of selves. *Journal for the theory of social behaviour*, 20(1), 43-63.
- Emerson, C. (1996). The outer word and inner speech : Bakhtin, Vygotsky, and the internalization of language. In H. Daniels (Ed.), *An introduction to Vygotsky* (pp. 123-142). London and New York : Routledge.
- Giroux, H. (1992). *Border crossing : Cultural workers and the politics of education*. New York and London : Routledge.
- 保坂裕子 (1999). 「教室学習場面における動機とアイデンティティの物語的構成 — 教室の解釈的参加観察研究」日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第24巻, 39-48.
- 保坂裕子・山住勝広 (2000). 「ナラティブと自己の対話的構築 — アイデンティティの文化プロジェクトの社会的詩学へ」『大阪教育大学紀要』第V部門, 第48巻第2号, 171-190.
- Labov, W. & Waletzky, J. (1967). Narrative analysis : Oral versions of personal experience. In J. Helm (Ed.), *Essays on the verbal and visual arts: Proceedings of the 1966 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society* (pp.12-44). Seattle: University of Washington Press. (=1997. *Journal of narrative and life history*, 7, 3-38).
- Lensmire, T. J. (1997). The teacher as Dostoevskian novelist, *Research in the teaching of English*, 31(3), 367-392.
- Penuel, W. R. & Wertsch, J. V. (1995a). Vygotsky and identity formation : A socio-cultural approach, *Educational psychology*, 30(2), 83-92.
- Penuel, W. R. & Wertsch, J. V. (1995b). Dynamics of negation in the identity politics of cultural other and cultural self, *Culture and psychology*, 1, 343-359.
- Talbot, J., Bibace, R., Bokhour, B., & Bamberg, M. (1996). Affirmation and resistance of dominant discourses: The rhetorical construction of pregnancy. *Journal of narrative and life history*, 6, 225-251.
- Выготский, Л. С. (1925/1982). Сознание как проблема психологии поведения. Вкн. Л. С. Выготский, *Собрание сочинений, Том I: Вопросы теории и истории психологии*. Москва: Педагогика. (1987. 柴田義松・藤本卓・森岡修一訳「行動の心理学の問題としての意識」『心理学の危機 — 歴史的意味と方法論の研究』明治図書.)
- Wertsch, J. V. (1997). Narrative tools of history and identity, *Culture and psychology*, 3, 5-19.
- Wertsch, J. V. (1998). *Mind as action*. Oxford, N.Y. : Oxford University Press.

(博士後期課程1回生, 教育方法学講座)